〈報告〉

「そのあと展vol.2」; “写真の社会経験”としての展示

『近つ飛鳥　写真による「場と事」の研究プロジェクト』の展示・考察

立 花 常 雄

2018年4月23日から4月27日まで、大阪芸術大学内にある体育館ギャラリーで「そのあと展 vol.2 」[1]が開催された（写真1）。この展覧会は、写真学科で結成されたプロジェクトである『近つ飛鳥 写真による「場と事」の研究“大学周辺の南河内を写真で記録しよう”プロジェクト』の成果報告と考察を兼ねたものであり、2017年6月に富田林市の寺内町にある「じないまち交流館」での最初の写真作品の展示および報告に次ぐ第2回目の展示・報告となる。今回の「そのあと展 vol.2」では先の展示で発表した写真作品を加え、新たにプロジェクトメンバーが大学周辺の様々な地域で撮影して現像し、プリントをおこなった、アーカイバル処理による銀塩モノクロバライタ印画紙[2]での作品の展示が中心となっている。各写真作品は余分な装飾のないモダニズム様式のアルミフレームに統一されたブックマット仕様で額装されており（20×24インチサイズ10点、16×20インチサイズ37点、11×14インチサイズ10点、16×20インチサイズ木製フレーム6点の合計63点）、展示自体としては伝統的な様相となっている（写真2）。この展示の主体であるプロジェクトは、写真学科を中心とした教員と学生及び卒業生によって組織されており、「銀塩写真による大学周辺の南河内地域のひと、もの、ことを撮影・記録し、アーカイブしていこう」という思いから2016年4月に発足して現在に至っている。

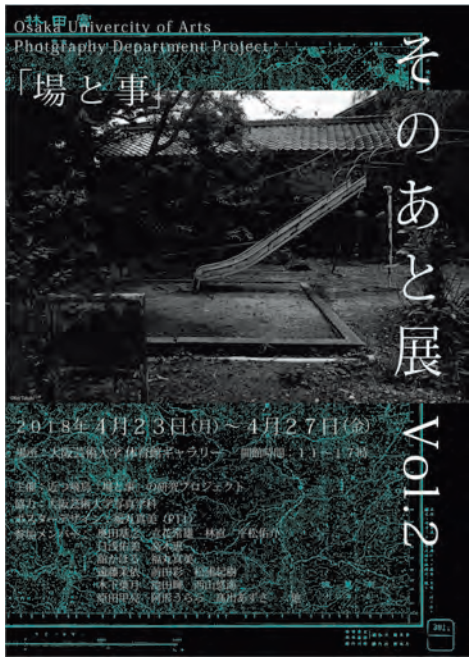

写真1　「展覧会の案内ポスター及びフラーヤー

展示は後述するプロジェクトの理念に沿って、3つのパートから構成されている。まず、最初のパートでは、「**みつめる―撮影・記録プロジェクト―**」と称し、2017年6月の「じないまち交流館」での展示作品を再展示している。これはプロジェクトメンバーが揃って富田林市の寺内町界隈を撮影した写真を中心としたもので、今回はこれをそのまま展示している。フレームサイズが20×24インチサイズのなかに上下2段構えの設えとなっており、上部が写真の作品で下がその写真のイメージが含まれているコンタクトプリント[3]をブックマット仕様で展示された10点からなる（写真3）。展示を観る人はコンタクトプリントの中に上部の写真イメージを見つけるとともに、コンタクトプリントの当該するカットのその左右（前後）のカットや上段や下段のカットのイメージの連なりをも同時に且つ重層的に見ることができる。そうして撮影者の撮影にあっての写真イメージの推移を知ることが可能となり、その写真が選ばれた基準などをそれぞれに判断するように促される。コンタクトプリントを同時に

示すことによって撮影・記録という行為が当人のみならず、その追体験として観る人にゆだねられることにもなり、“みつめる”という言葉に積極性が生じる。次に「**とどめる―保存・整理プロジェクト―**」のパートでは大学周辺の南河内の各地域を数回にわたり行われた撮影会でそれぞれが撮影したものや、またこれとは別に各自が個々に撮影をおこないプリントした写真作品を市町村ごとに展示する構成となっている（写真4）。ここに展示されている写真作品も、（最初のパートで展示されている写真作品のように）一緒に展示はされてはいないが、当然コンタクトプリントが作られ、これより選んだものを展示している。むしろ最初のパートにある写真作品とは違い、コンタクトプリントが不可視の状態にあることで、写真イメージの推移が実際の展示作品の連なりでなされることになり、大学周辺の南河内地域全体のイメージを一つ一つのそれぞれの写真ごとに見出すことができる。そして展示物という物質性が具わった写真を保存し整理していく中で、より“とどめる”というアーカイブへの取り組みの意識が強くなる。3番目の最後のパートは「**つなげる―活用・展開プロジェクト―**」として、プロジェクトの活動の一つであるアーカイブの観点より、メンバーの過去の卒業作品から志向性を同じくしている、藤井寺市の土師の里の町並みを撮影した卒業作品（2014年度卒業制作、16×20インチサイズ木製フレーム6点）の展示をおこなった（写真5）。ある写真がアーカイブという視点のもとに新たな趣を見せる。それは異なる文脈にさらされることにより、卒業制作という輝きとは別の新しい輝きがそこに現われ出るということである。つまり“つなげる”という方向へと展開していくのである。

写真2　展示風景1　「展覧会会場風景（全体）

今回の展示されている写真作品群は、地域の観光名所の撮影にとどまるものでもなければ、その場所性を全く消し去った抽象化されたイメージの集まりというわけではない。実際にそれぞれの写真は、地域の記録を標榜はしているが、タウン誌やガイドブックなどに散見されるフォトジェニックな写真とは異なる。あるいは埋蔵文化財センターの客観的な記録性が必要とされる遺跡や出土品の資料写真のような無味乾燥なものでもない。例えば、ある人の写真には、ここで出会った人たちと会話と視線を交わしながら的確な撮影技術によって、そこで放たれるその人のオーラ（光）が写しとられている。ある人の写真は、この地場が放つ光を叶わんばかりにと大きな感材を携えてじっくりと対象を見つめている。ある人の写真には、そこでの人々が暮らすこの生活の痕跡に詩的想像力を働かせレンズが向けられている。ある人の写真には、今も目にすることのできる遺産に歴史の鈍重さを合わせ写しとどめようとしているのが感じられる。ある人の写真には日常のさりげない時間の流れの中にその土地がもつ歴史を目に見える形として表現しようと構図などを工夫する姿勢が伺える。ある人の写真には、写真を撮る楽しみを地域との出合いという形で素直に写真に託している様が見てとれる。また、銀塩フィルムによる撮影の全てが初めての経験であった者も展示をしている。プロジェクトメンバーはそれぞれの志向性は当然異なりつつも、大学周辺の南河内地域を、風地そこで営まれる生活と共にある景色の姿を、写真におさめておきたいという思いは同じである。撮影に赴く際にあっては、入念なリサーチをする者もいれば、遭遇の偶然性に重きをおく者、あるいは、小型カメラを携え歩きつづけ、見つづける、その身体行為を写真にフィードバックしようと試みている者と、さまざまである。いずれにしてもここに展示されている写真作品群は、メンバーの各々が積極的にプロジェクトに関わり、「地域の景色を見つめ、その時のその場所の光をとどめおきたい」という思いのなか自身の目と足を使い、またアーカイブというもう一つのプロジェクトを視野に入れつつ、地勢学的な史的想像力を働かせ、そして詩的想像力で

もって写真を撮影していこうと取り組んだ結果によるものである。また、地域のアーカイブに積極的に関わっていこうという意識の現れとして、展示されている写真作品に撮影者の名前を記すことはなされていないのである。

そもそも、この展示の主体である『近つ飛鳥 写真による「場と事」の研究“大学周辺の南河内を写真で記録しよう”プロジェクト』（以下『近つ飛鳥プロジェクト』）は、大阪芸術大学写真学科の学生や卒業生と教員とがおもなメンバーとして一緒になって運営している。私達が学んでいる大学は、大阪府の南部に位置しており、いわゆる南河内という地域にある。かつて歴史的には、この辺りが太古よりの道が大和に通じ二上山を頂く、「近つ飛鳥」と呼ばれていることを入学してから初めて知る学生も少なくない。実際に、いまも大学が位置する周辺の地域には古墳を始めとして多くの史跡があり、田園や山なみが広がる、遥か古えの面影をも残す豊かな風土に根ざした暮らしを伺い知ることができるのである。日々の写真教育に携わるなか、あるいは学生生活を過ごすなかで、教員と学生とが共に「地域のそのような景色をみつめてみる。これからも幾重にも続いていく季節ごとの多様なる南河内の、その時のその光景をいまここにいる自分たちが写真にとどめおきたい、記録しておきたい、そして未来へとかたりつなげていきたい。」そのような思いがこのプロジェクトの立ち上げの動機となっている。

私達の『近つ飛鳥プロジェクト』は大きく3つの理念からなる。一つは、生活や風景を見つめる、「**みつめる―撮影・記録プロジェクト―**」で、大学の周辺である近つ飛鳥の「ひと・もの・こと」を銀塩カメラで撮影している。プロジェクトメンバーが個々に銀塩フィルムを用いて四季折々の南河内の撮影記録をおこなっている。用いている銀塩フィルムや銀塩印画紙による、光学的で物理的なあるいは化学的になされる、（被写体となる対象からの）＜光＞の蓄積ということを意識して、“その時のその場所の光をとどめおく”という思いのもと、現前する対象をみつめることから始めている。次に、撮影された写真を後世まで伝えられるようにしっかりと形あるものとして残していく、「**とどめる―保存・整理プロジェクト―**」としてアーカイバルの処理法に基づいた銀塩ネガフィルムの現像および銀塩印画紙への焼き付けをおこない、その写真の保存や整理を目的として活動している。ここでは、具体的な「物」としての写真（写真の物質性[4]）という意識のもとに、写されている写真のイメージが映像情報としてアーカイブの対象となるのみならず、現像処理をされたネガフィルムや印画紙（写真）も、その物自体としてアーカイブの対象となる（＝文化財としての写真）という考えから、物質的にそれらを後世にまで文化財として残しておくために保存や整理をおこないアーカイブしていくことを目的としている。そして3つめは、それらを未来に向けてつなげ言葉を紡いでいく、「**つなげる―活用・展開プロジェクト―**」として、保存・整理された写真とコンタクトプリントのデジタル化を行い、映像資料としての活用ができるようにデータベース化しデジタルアーカイブを構築する。そしてアーカイブという目的のもと、保存・整理された文化財となる「物」としての写真とともにデジタルデーター化されたそれらの映像資料が未来に向けた地域文化創造の貢献へとなるような様々なワークショップなどを企画し、開催していく。以上それらを包括的に機能させていくことをめざしている。今回の展示はそのプロジェクトの活動報告の一端を示している[5]。また、このプロジェクトのユニークさは、銀塩写真による撮影記録はさることながら、活動するメンバーである学生達が入れ替わり立ち代わるという流動性にある。継続されるプロジェクトにおいて、主たるメンバーである学生の多くは在学中の数年という期間このプロジェクトに参加することとなる。また一方の教員は、そのような学生達のプラット

写真3　展示風景2　「みつめる―撮影・記録プロジェクト―；2017年 じないまち交流館で展示した 富田林寺内町界隈の写真

フォーム的な存在となっている。学生達にとっては限られた時間であるからこそ、自身のみつめる、<ひと・もの・こと>のさまざまを、生の証（痕跡）として写真（痕跡）にとどめおくこと、そして銀塩写真がなによりも<光を物理的に痕跡として永遠にとどめておくものである>から逆説的に、“まさにそのときの光景である、その時のその場所の光をとどめおきたい”という思いを強くする[6]。

『近つ飛鳥プロジェクト』は、大学機関での写真の学びに対して、写真の持つ社会的な意義や写真の記録性という問題意識により、まずは、私達の大学の周りにある豊かな風景や歴史というものに関心を向けてみようということから始まった。最近は、よく地域のアーカイブということに注目があつまり、実際に多くの自治体や行政などが市民に広く呼びかけて地域の昔の写真を募集したりしている[7]。また、地域のおじいさんやおばあさん達が語り部となってその町の歴史を伝えとどめておくというような催し物が開催されていたりもしている。確かに、そのような活動の積み重なりがその地域の歴史をつくる。そして、その伝えつなげられていく営みの有り様が私達の考える文化ともいえるのである。そのような文化創造への写真による貢献の一つとしてこのプロジェクトの意義が求められる。さらに、デジタル環境が私達の生活に広く浸透し、写真をとりまく状況も大きく変わりつつあるなか、例えば、写真が静止画と呼ばれるようになっていたり、動画の下位概念に格下げされているような感じが見受けられる。本来であるならば、映画に代表される動画と静止画である写真は（映画の直接の先祖には間違いはないものの）その社会的な役割や機能を異にするはずのものであるにもかかわらず、「静止画の集まりが動画である。」といったように関係づけられている。また静止画・動画という分け方には、それまで写真と考えられていたものの境界を不明確とすることもある。（逆に新たな境界が画策されていくという積極的な事態をもたらすこともあるが）[8] そのような状況において、いま写真に社会があらためて求めているものとは、“単数の写真”[9]としてだけではなく、動画への延長とも全く違った、流動する“複数の写真”[10] というのが考えられる。そしてその代表的なものにアーカイブ/archive としての写真があげられる[11]。 更に私達は現行のアーカイブへの取り組み方だけではなく、むしろ未来に向けてなされるアーカイブを作っていく、担っていく、運用していく、という意識の現れとして、造語ではるが、archive-ing/アーカイヴング ということを強く志向している。こうした私達の写真による働きかけが、広く社会に求められる「写真の社会経験」であると考える[12]。

写真4（その1） 展示風景3 「とどめる―保存・整理プロジェクト―；河南町の風景や街並みを撮影した作品」（河南町）

写真4（その2） 展示風景4 「とどめる―保存・整理プロジェクト―；竹内街道周辺の風景や街並みを撮影した作品」（太子町）

最後に、この展示で試みられたことは、プロジェクト名にも記載されている「場と事」の意味付けにある。写真がつまるところ写すことができるのは、人・物・事である。<（この）人>や<（この）物>は現前にあるために容易いのだが、とりわけ<事（このこと）>に関しては銀塩写真の特質がゆえに難しい。（このプロジェクトの特徴の一つが、「銀塩システムによる写真」での取り組みである。）とりわけ、銀塩写真の化学・物理学的な性質上、写真はあくまでもレンズの前にあるこの対象物しか写すことが

できないのである。そのために、私達が＜事＞を写すためには（＜事＞が人と物との複雑な関係性から生じる現象であるからこそ）、なんとかして＜（この）事＞を目の前にさらしだす術を考えなければならないといえる。おそらく、個々のメンバーの取り組みの姿勢が術としてそこに現れているのだと思う。加えてもう一つ、人が集まれば何かことが生じ、物も集まればそれもことと化す。こうして、私達は写真を撮り続けていくなかで、この膨大な写真群がやがて＜事＞となり、そしてアーカイブとなるのも必至であろう。あるいは＜事＞を撮るとは実のところそのようなことであるとも言える。また、この人・この物は当然限定される、すなわち「場」をもつのである。そして、その「場」の重なりの整然や錯綜、堆積の運動そのもの（タグ付けに代表されるアーカイブにおける検索システム）が新しい「事/こと」に他ならない。＜事＞は記録され蓄積されアーカイブとなり、他の文脈に移され得ることになる。プロジェクトの名前である「場と事」とはその場における、この人とこの物との遭遇により生じる＜事＞を撮影しようというのに由来する。同時にアーカイブとしての＜事＞の移動（交通）[13]も忘れてはならない。更に付け加えるとするならばこのプロジェクトに賛同し関わる学生たちは、始めから卒業や巣立ちといった移動、すなわち交通が強いられている存在でもあるが、それは学生の特権でもある。此のものが彼のものにかわる、その変容の様を最も身近で体験してみたい。これこそがプロジェクトの意味であり、今回のこのような展示空間をつくりあげたことがプロジェクトにある「場と事」なのである。

写真5　展示風景5　「つなげる―活用・展開プロジェクト―；
高木恵『小さな時間』（写真学科2014の卒業制作）の作品展示風景」
（藤井寺市）

今回の展示には、プロジェクトのメンバーであり本文報告の推薦者である、奥田基之氏（写真学科准教授）と、平松佑介氏（写真学科非常勤講師）、林直氏（写真学科非常勤講師）、写真学科副手（日浅、高木、紺田、西村、渡辺 敬称略）の協力をいただいています。

註

(1) 展示のタイトル名である、“そのあと”とは、プロジェクトの趣旨より「その時のその場所の光をとどめたい」から時間や場所、思いを指す“その”とアーカイブプロジェクトとしてこれからを指す「後」、軌跡としての「跡」の2つの意味を込めた“あと”をあわせて『そのあと』としている。

(2) ハロゲン化銀を感光させ現像によって像を形成し、写真画像をえる光化学システムで作られる印画紙/プリント。デジタル以前は写真といえば銀塩写真のことを指す。なかでもバライタ印画紙とはアーカイバル処理に適している印画紙であり、適切な処理の後は恒久的な画質保存と安定性がえられる。

(3) ネガフィルムを写真印画紙に密着させて原寸大のポジ像を作ること。ベタ焼き、密着プリントとも言う。一般的に、35mm判銀塩フィルムでは1本分のネガを6コマひとつながりとしてカットして印画紙上に並べ、1本分のネガフィルムを一枚の印画紙に密着焼きさせてつくる。多くの場合、コンタクトプリントによって得られるポジ像を判断し、プリントするネガを選び作品に仕上げる、いわばインデックスプリントのような役割である。

(4) 写真の出現から180年を経た今日、とくに初期の写真はそこに写されているイメージの情報がもつ価値もさることながら、その写真それ自体が他の文化財同様に価値あるモノとして取り扱われている。
参照　宮崎幹子「博物館と文化財写真」
久留島典子・高橋則英・山家浩樹 編『文化財としてのガラス乾板』
第10章　2017年

(5) 今回の展示では、具体的なアーカイブ構築によるデータベースの有り様などは示されてはいない。

(6) ロラン・バルト（Roland Barthes 1915-1980）の写真に対する考え方の「それは-かつて-あった/Ça-a-été」が写真を光の痕跡ととらえている。
『明るい部屋』ロラン・バルト（著）　花輪光（訳）1980年

(7) 例えば、宇治市歴史資料館による　第16回写真展「懐かしの街角・

思い出の一枚」2017年などがあげられる。

(8) cf section1『Photography Theory』James Elkins ed 2007

(9)『写真のアルケオロジー』ジェフリー・バッチェン(Geoffrey Batchen)(著)前川修(訳)他　2010年　第1章　「複数の写真」p14　参照

(10)『写真のアルケオロジー』ジェフリー・バッチェン(Geoffrey Batchen)(著)前川修(訳)他　2010年　第1章　「複数の写真」p14　参照

(11)代表的なものとしてはアラン・セクーラ(Allan Sekula 1951-2013)の一連の写真実践がこれに当たる。

(12)緒形直人、後藤誠　編『写真経験の社会史』2012年　序説　参照

(13)Allan Sekula"*The Traffic in Photographs*"Art Journal,Vol.41,no1 1981 cf

作品リスト(未展示含む)

1　2016年　富田林市

2　2016年　富田林市

3　2016年　富田林市

4　2016年　富田林市

5　2016年　富田林市

6　2016年　富田林市

7　2016年　富田林市

8　2016年　富田林市

9　2016年　富田林市

10　2016年　富田林市

11　2016年　河南町

12　2016年　河南町

13　2016年　河南町

14　2016年　河南町

15　2016年　太子町

16　2018年　富田林市

17　2018年　富田林市

18　2018年　富田林市

19　2018年　河南町

20　2018年　河南町

21　2014年　羽曳野市

22　2018年　富田林市

23　2018年　富田林市

24　2018年　富田林市

25　2017年　河南町

26　2018年　富田林市

27　2018年　河南町

28　2018年　河南町

29　2018年　富田林市

30　2018年　富田林市

31　2018年　河南町

32　2017年　河南町

33　2018年　富田林市

34　2018年　富田林市

35　2014年　太子町

36　2018年　富田林市

37　2018年　富田林市

38　2018年　富田林市

39　2018年　富田林市

40　2018年　富田林市

41　2018年　富田林市

42　2016年　河南町

43　2014年　羽曳野市

44　2018年　富田林市

45　2016年　河南町

46　2014年　太子町

47　2014年　太子町

48　2014年　太子町

49　2014年　太子町

50　2014年　太子町

51　2014年　太子町

52　2014年　太子町

53　2014年　太子町

54　2014年　太子町

55　2014年　太子町

56　2014年　太子町

57　2014年　太子町

58　2014年　太子町

59　2014年　太子町

60　2014年　太子町

61　2014年　太子町

62　2014年　太子町

63　2014年　太子町

64　2014年　太子町

65　2014年　太子町

66　2014年　藤井寺市

67　2014年　藤井寺市

68　2014年　藤井寺市

69　2014年　藤井寺市

70　2014年　藤井寺市

71　2014年　藤井寺市

阿形うらら（写真学科2回生）　5.
池田輝（写真学科3回生）　9
遠藤茉依（写真学科2回生）　13.32.
奥田基之（写真学科教員）　6.11.12.16.25.42.44.45
木下葉月（写真学科4回生）　4
高木恵（写真学科副手）　1.17.22.23. 66～71
髙出あずさ（写真学科2回生）　10
立花常雄（写真学科教員）　19.20.21.35.43
西山悠海（写真学科3回生）　8
日浅佑美（写真学科副手）　14.15.27.28.31.33
林直（写真学科教員）　24.36.37.40
原田甲亮（写真学科3回生）　3
平松佑介（写真学科教員）　46～65
前田彩（写真学科2回生）　7.29.30.34.38.39.41
松浦起樹（写真学科2回生）　2.18.26